

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Kodak
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

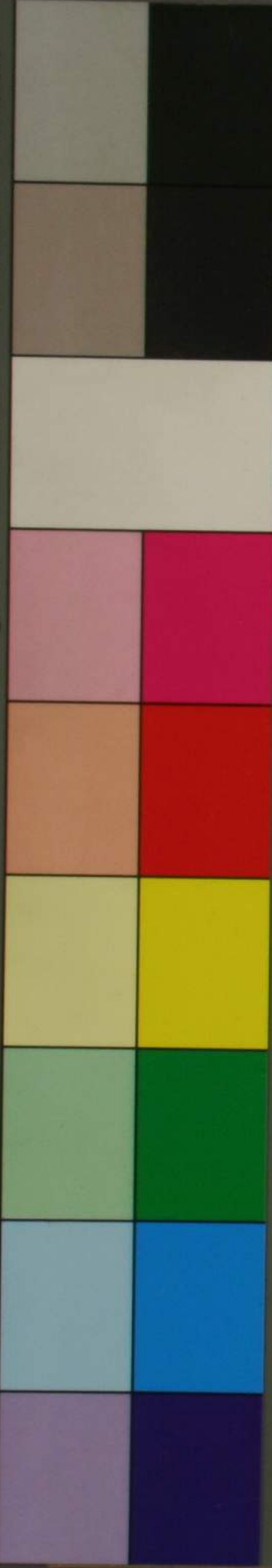
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

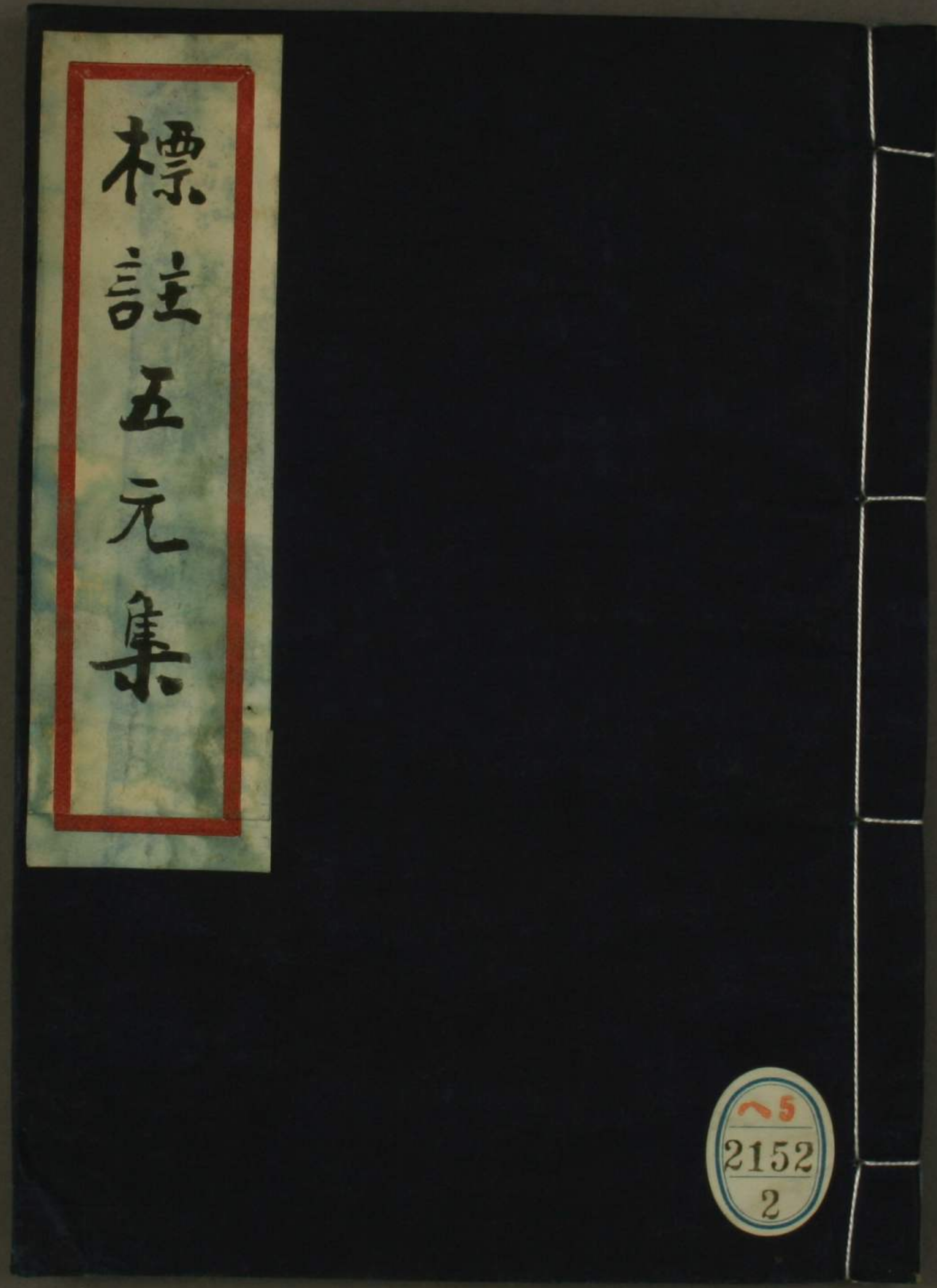
15

B

17

18

19



標註五元集

2152
2



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

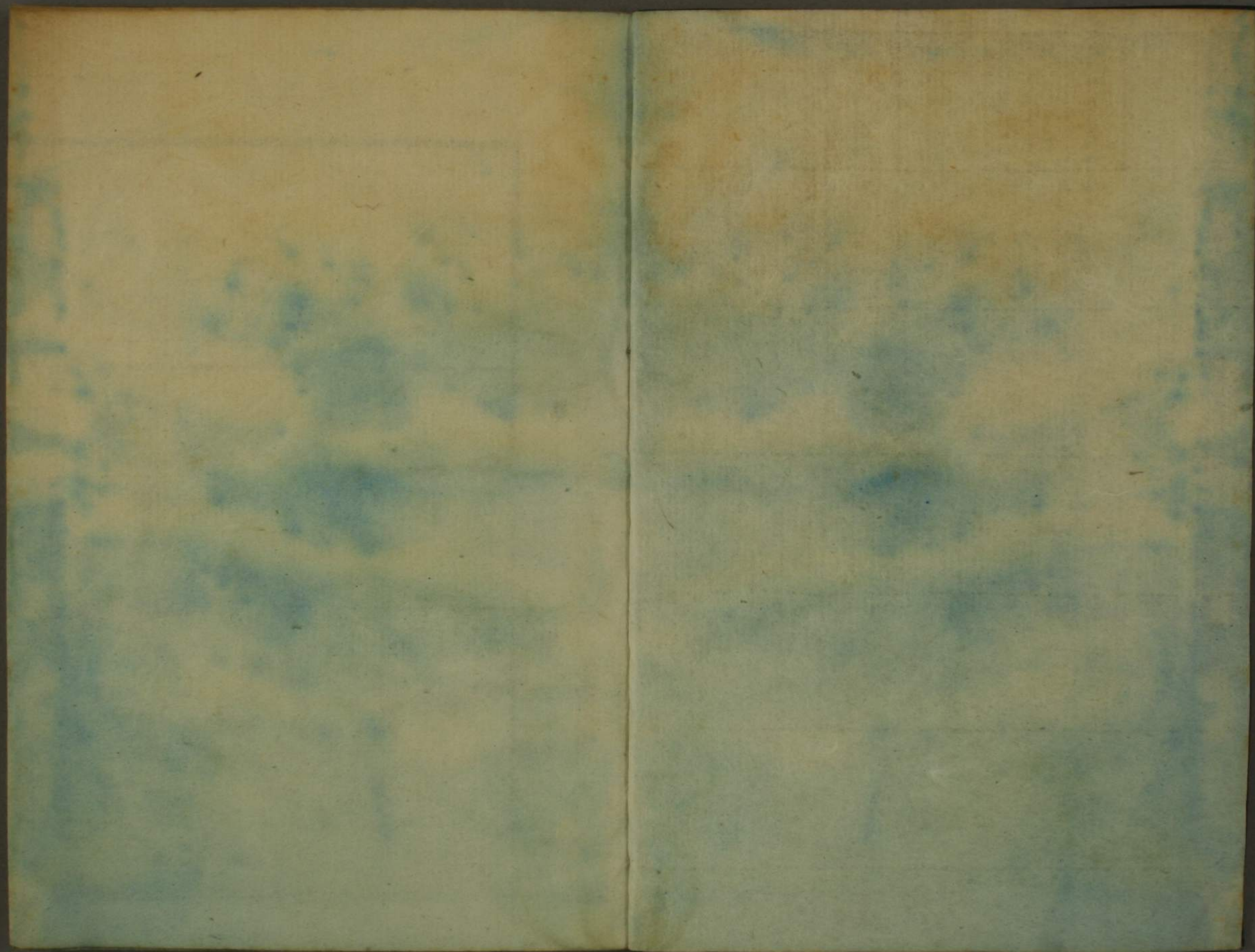
6

7

8

9

20



暁
 を上子園をうきてやむめのふ
 迷ひるは三位よあて時を
 長崎を原たり家子紅毛朱
 貢のぶく奇なりとして
 桐のむす波の路路不言
 愛娘子
 鶏啼て玉子吸蚊あつらひり
 序令初めて上系子餞
 涼とと都のそくや達や入金
 州さるるハ皆喰ものそ夜の州



水肴十上出タル形面白キトテ
 其マニ句作荒ナリ
 ツレツレ草
 園別當入道百日鯉ヲ切リテ
 ヲ云マニ戀シメハ洗鯉ハカハ合ハ
 庖丁家ニ洗鯉傳ノヨレ
 〇洗日や州むつてまきれ
 〇未詳
 駒ノケアケハ馬煙
 子共ノ句ナリ乳ヲ吞テ居テ清水
 カ本ニテ祭ヲ見ルヨウナリト言心カ
 面白シ乳ハ清水カ合子心ハ
 乳カ祭ニヤト云句ニシテ
 〇人ヲキホイモ都ハサスカニモノ柔
 カニヤナリ

手ぬぐい木橋ハ油テ面
 百日乃あつらひ洗ひ鯉
 四鉢よ釣のけあゆ心てん
 乳のめを清るもの祭るか
 祇園
 七日
 許よのくろのまひりか

暁
 を上と圖をうまてやむめのふ
 迷ひるは三位よふの時
 長清を原たり家子紅毛朱
 貢のおく奇なりとして
 相のも彩波の踏踏不言
 愛娘子
 鶏啼て玉子吸蚊ハあうらり
 序令初めて上系子餞
 涼とと都のそくや連や金

州のそくハ皆喰ものそくの州



水肴ナト出タル形面白キトテ
 其マニ句作セナリ
 ツレツレ草
 園別當入道百日鯉ヲ切リテ
 ヲテラ戀シメハ洗鯉ハカハ合
 庖丁家ニ洗鯉傳ノヨレ
 洗ハ州ハむハてハまハれ
 駒ハケハアハケハ馬煙
 未詳
 子共ノ句ナリ乳ヲ吞テ居テ清水
 カ本ニテ祭ヲ見ルヨウナリト言心カ
 面白シ乳ハ清水カケ合子心ハ
 乳カ祭レヤト云句ニテマ
 人ヲキホイモ都ハサスカニモカ柔
 カレヤトナリ

手ぬぐい木檜ハ油で面原
 百日乃のあつらゑや洗ひ鯉
 血跡よ釣のけあけや心てん
 乳のめを清きもの糸あか
 祇園 七日
 許よのそくのまひりか

○我等迄ハ己カフナリ
土ノ車ノ我ラマテ道ニカラス大君
ノトアリ天下祭ト云フモアリ
○番附ヲウルヲ見附スナキ句ニ
作ナリ

○松影ニト書レ集有松原ヨロ
シ画ノヨウニ三三六ナリ
未若葉ニ

問
○能因不食ノ清輔々袋艸
紙ニアリ
○天ヲ梁トシ地ヲ礎トス古文後
集 留伯倫

○列仙傳雞犬仙藥ノ白ヲトメ
テ仙ニ成リ空ニ吼ト云フアリ

山王の氏ありて
我等迄天下祭や土くま
番附をうらも祭のきぬひ
松原子田令あや昼休

夏瘦ニ能因ノ小食
能食ハ天地を看る友衣
香藿散大いあふ甲でやみ奉

白河ノ古事ヲ踏
夏瘦ニ能因ノ小食

○昔ハ宇治ニサラス影ナリ
未詳

○西國ノ山涼闇ノ夜ニ女ト男
タニ二人ノリ涼キ中ノ舟ヨ
リリニ氣ニテ蟹ヲナケ込ル句歌源
氏浮舟ノ傳

○合羽ニカハルト云所ソクタイニ
カハルナリ
○二見ハ下有ニツシワレ句ニ
待宵ト名月ト別ル

○朧石巻
秋ノ月毛の約我
や并成りけし時のもん

蟹をもちてあまふ
うき舟の涼 お中かの甲
あてりき蓮よけふお節郎

大雨大風 名コレ六月晦日
吹流の合ぬりそそくゆ病ハ
待宵やのらハ二見ハ及者ワ

や并成りけし時の縁
傘持ハ月おほくすまも也

昔ハ三奏下向ノ聲ナト歌ノ
 會有レトナリ武藏一國ノ大名
 所名月ノ清キニ歌ノ會モアラン
 トナリ
 ○須テ住吉ナト名所ノ月ニモテ
 ハマス所ナリ佃島ハ住吉ヲウツサレ
 タリ
 ○コクラナリ明石ノ領主小笠原
 殿備前ヨクラハ所替ナリ小クラ
 ハ縮ヨリヲモツレタレハ明石縮ヲ
 小クラヨリ縮献上ナリ古郷ノ月
 ヤ明石瀉ナリ
 ○釜ハ出所ナリ昔ハ天明ナトモ
 出タリ雨ニカマウクカ逗留シテ
 今日ノ月佐野ナト上品佐野
 駒留テト有

本母さよこその舎あけけの
 名月やこゝ住吉のつゝつ
 名お月
 小くくくくくくくくくくく
 雨 佐野紀高ナリ定家郷ノ神打拂ト
 ヨマレハ大和ト云セツモアリ
 約とて釜買おくくく月

○何ノコトモナク川筋ノ關所ヲ
 云立タルナリ氣色ワヒキキ幹見ニ
 ナリ
 ○俳番匠ニ舍利講ノ心ヲトアリ
 岩清志心ノ月をあるハナリ
 之ノ山ノ月をあるハナリ
 ○カヨウニ御チンサマレマスハイツチ
 昔ノ男山ト御山ノ月ハ懸テニ
 ナリ
 ○法身集ニ水ヲ觀トテ水上成
 ナリト見ヘタリ
 ○トウレタモノカ水ハ文字ヲ書
 テヨメヌ如クシヤト云句作
 ○平卧幹ニ名月ニテ酒吞ニ出
 タルナリ頬カフリト云ニテ月光ノ白
 日ナリトニヘタリ

川筋の関をいづくくく月
 新月やいつをむくの男山
 水相觀の繪
 家書てよめぬおき水月
 名月や居酒のまんと頬
 日ナリトニヘタリ

○妙言ナリ

○納屋ニ何魚カ有ル雨モ風モ止テケフノ月ト云句

○雀ノ已レ已レカ塘ヲ定ル昏カタ名月ノ清光ニテ見ユナリ

○扱ハ夢カトナリ曾我物語

○須磨ノ卷相臺帝ノ聲ニ見ヘタマイテ覺ノ跡月ノ兒ノミ守ラレケリトアリ時宗ヲ

得蟹無酒

赤壁ノ賦ヲ直ニカクナリ

蟹を画て産み這す月影
名月やそのうよ木の影

雨

納屋よ何雨も晴くけり月
名月や竹を定むもむ雀

夢りとも時宗起て月の色

いづれもそ

更ふと祢宜の辭や松の月

紀川いづせり

水早キ川ナリ

所思 只思フト云ナリ

心もよひし心つしやすのち

名月や金くひるの雨の友

閑のおハ吉系ハく月おハ

良材集ニ女白鳥ト化シ又紀

關守カヲト化ス有タツカヲナリ

おもひの紀の雲さうしつこまゆ

おもひの紀の雲さうしつこまゆ

ナリ十六宵ヲ待モ心ツクレナリソツク

十四日ノ月ヲ見ルナリ

○金クラヒ子モ雨ニテ客ナキマ友

○唐詩長安ノ聲

○吉原ハ灯ヲトモテ依テ月夜ニマ

ト云ハムナリ傾城ナリ着物ナキ

ラカ月夜レシ人ヲ月長文作
 也吉原ハ伏見ヨリ見テ目録ナ
 ○夜ノ初メテ所傾ト云字ニ見ヘ
 久坐頭ノ曲經テクタヒレシ姿ナリ
 ○廣所ニテ月ヲ見テホササシ少
 年行人輩ノ月見ヲ關居ナリ
 ○伏見草ト云マカサト職人歌合
 三有共伏見ト云テ月見ヨリ同
 ○三千人ノ門第ヲワカシ六疊
 敷ノ方丈ノ入トテ山ノ端ノ年丈
 月影ヲ床ノ月ニ入レト云
 ○漢書
 ○瓜ハ千キ八月ヲ取ロウト瓜ニ水
 ノ月輪ヲハ千キテ見ルナリ有無

園のあはれきあはれと日あはれ
 月出テ彦郎字取似く小舟りか
 人者や好見とめひ伏見草
 維摩のびん
 山のこゝ大落入り床の月
 張良圖
 胸中乃各出とふく乃月
 更布袋の月を袖に繪ふ

ノ論ナリ世ニ云瓜ハ千キニハ非
 ○葉ニモル面白シ
 家々あはれけしもの瓜ノ子
 枕詠あはれ瓜のほろもも
 ○未若葉
 州の産瓜多しらんこゝニ瓜
 しとて瓜ののりしとて
 のそれしとて瓜ののりしとて
 三尺丁十寸有共己カ袖ニテ
 月の清光ヲ覆フヲ袖帳ト作
 タリ出入ノ新ト空也
 ○日ノ露ニ入テ民ノ頼政
 ○人トシテ大田山の山守ハ木
 くりけてのミトをミテ
 地下ノ者ナレト職分ナレハキテニ
 ヲト云所面白シ

有てあき水のひよや瓜をよ
 寺
 ちの月つるう輪ハ
 名月やうやく向ふ袖帳
 烏帽子屋ハ急はりて見と
 月

○日ハ富士ニ入ヲ月ノ出ルト両方ヨリ出入ノ作ナリ空蟬ハ源氏ニモ空蟬ト身ヲカヘテケリトモアリト月ノカハ所ナリ

○深更ニナリテ琵琶ヲシマラサマヒニ月形ト云所モ有

閑倚橋

猿這子あそびんや橋乃月
含秀亭

富士ノ入目を守塚やきふ月

風雨

雷ノ楫ハあひきそ月見舟

小野川せんとあそび銭

入月ヤ琵琶を袋よあそびん

莊子ニアリ
三日禮をつつむとん

○萩ノ露ニ詞書アリ親病氣ノ内看病ノ時ノ句ナリ心ハ矢竹ニ思共親ノ病氣ナレハ是非ナク十歩ニ錢ヲ握ヨウナリトナシ

○句兄弟

塩鮑の歯望もうし魚の店

○樂天

名月ヤ十歩ノ錢を握り

巴江

地名祖ノ声ヲ聞ハ腸ヲ断ト云コトモ含メリ

聲ノれく猿の齒白き此月

舟中よわていそ中て袋よ

そつる杖の楫はゆるるそ

月見ふ杖よつるける小舟は

琵琶行をよむ

良振よ比巴を興して友も

協陽の女と思ひあひ酒をそ

楽天

夜水尾院
近江ナリ歌ニ遊女ノ沙汰ナ
○近江ナリ歌ニ遊女ノ沙汰ナ
○未詳

灯をささげし御愛しや
村。酒いづれしと和。渡の舟
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや
とをささげし御愛しや

○十三ノ曹保へ名月トヲ合ナリ
○近江ナリ歌ニ遊女ノ沙汰ナ
○未詳

○近江ナリ歌ニ遊女ノ沙汰ナ
○未詳
東坡三樂
男子ニ生シ京ニ生シ治世ニ生シ

○近江ナリ歌ニ遊女ノ沙汰ナ
○未詳
後水尾院
○未詳

是ヲ取タカ京ニテト云ニ叶フ心
ニ名附モ人カニツ有リトナリ
○元政カ美濃フ記有母ノ頼
寄テトアリ
うつゆよさのこも夜の病れ
手ハ月成とのぬの起返るん

○未詳

○後ノ月ハソソロ茶カ發ルニヨツ
テ名月ニ粉ヲ卸トヲ懸ケ合ラ
源氏ニカト白ノ音耳姦トアリ註
ニ藥研ノトトアリ
○住吉寶市ナリ此日夜芝居
ナト有十三日

芭蕉

母と月又けるふ
ぬるれまハ雨元政乃十三日

旅泊

うりさや江尻て三粒徳十粒

薬研てハ粉炊おる寸り後の

住の江や本芝居して浦乃月

○仲夏つて分別登る月久
りか

○伊勢物語布行ノ龍ニ天栴
子栗ノ大キサシテト有リ白玉ニ
芋モ交タキト俳諧ニシタナリ
○祖徠先生咄ニ菓鴨ノ屋敷
ニテ大瀧ニ銀ニテ白玉ヲコレエ流
タルヨレ俤アリヤ

○主人大子ノ句未詳

○茶師ハ宇治ナレカソ住ト置
リ茶師江戸へ下ルニヨツテ旅寐ナ

○盆ノ始カ十三日ナレ懸合踊カケ
タリハサウイ合フ清光ニ照附ル
ヨウナリ

白玉ノ芋を交もや流乃月

後の月上の大子れる茶ふ

志のそすむ茶師を旅の

後此月躍りけり日金

十三日

○未詳

○所スルカキハ駿河舞ト置タリ
伯良ノ古事ヲ含ム

○平家物語三月見ノコトモ有ト
ラレテ行ハ召捕レタルコト宿十
レノ召捕レト云フハ一代一句之
外他ニ用ルコトナシ

○シハフル景宗トニセツ有リ年寄
タル人ノ世ノ世話シタルサナリ

やま月おろり物あき木橋所

閏十五夜 あつらひ

中番夜ハ照月をうつて 後河原

平家屋敷の

屏風

宿おのころれてけり外

柴少い着る人

名月や皺少く人の心世話

○美人ヲ抱レテ手ニテ己カ膝ヲ抱

ト懐古ニ作タリ

○新六帖

床の中ニ縋を抱テ幾夜

○棹ニ布團ヲ干テ置タルニ鳥ノ

乗タルナリセタ方カン深シ

○坐頭トトカタマサレテ待ホウケテ

居ニ頂ノ光ルヨウニ見ヘシナリ袖

ノ月ノ宿ルナリ

一体

○律師のつら乃皮ニそあ
川ありあつたつら乃皮ニそあ
夜乃花

名月や人を抱を縋

待乳山

こよひ満里棹のつら乃鳥

契不逢意

閨の灯も光る産路や袖の月

甲申 一体の狂詠自画を写す

律師河原相利とて月夜

○沙弥ヨリ刺

○甲申不知○今大梅所持

○夫木集 定家

○このはつらも 暑もさや すまじと
陸奥の志そめに見せそ秋の
夜の月

○蝦夷ノ氣ヲ吹テ已レカ形ヲカク
スナリソレヲヨサフクト云是ヲ消サントセ
ハ大根ノシホリ汁ヲカケヨトナリ胸
ヨサフクニ取ル

○十六夜ハ少シヲトロヘシ所ノ四十
位ノ儒者ノヲトナヒタル姿ナリト也
○ワキモノノ中ノ世の中

○名残ノ月ハ九月十三夜十六夜
夢ヲ出シタルヲ總ニ出ルト作タル也
○是ハ吉野ナトナリ古郷寒キナ

トアリ吉野ニテ見ルカ如シ

○干串海鼠ハ橋桁ニ似タルモノ
ナリ宇治合戦ノヨウニ作タル也月
ノ友ハ一求法師有集三月ノ下
知共有

○融ナトノ節ニ作タル

○水近樓臺先月ヲ携三月ヲウ
ルトシタリ

○ツレツレ草
盛親僧都錢二百貫芋ノ代類
置キテ芋喰ナリ芋ハ芋ハウル
聲凡僧都ノ二百貫本ト今日ハウ
レヨウトナリ

軒前
おの味

松前のまみ子
送る作

こころも大根で消さ
秋の月

十六夜ハ儒者ト名寄
はる

清草の穂も
目十三夜

笈の菓子古
病中制禁好

檜杉乃串海鼠

新宅吟
汝汲を
宗因先月

芋ソ
凡僧都の二百貫

芋のく先月をうらむ夕
アハ

宗因

○侍者よりあつたるの聲
きけりあつたる別乃き物々を

○物々たる名々をけりしもの
けりしものあつたるか

○夜半鐘聲至客船

○鐘ヲ鼓ト作タリ兼テ聞ハ兼
聞ト云フ御堂八門跡

○鎗倉十ト近キ旅路ニテ江戸
ヲ懐

○フリ上弓越ニ見タル句也
讀ナルヘシ

○今夜見テ仕舞テ吹井ノ浦ヲ

あつたるいひえんものをもいひ
すくし出たりけりしもの
物々たる名々をけりしもの

鐘聲客船

名月や御堂乃鼓のまをりし

遊子

いさよひや龍眼肉乃の衣

紀

玉津の浦

夜道共ト云句也此間三里程十
リ二段切見テヨハシト云句又ハ

リヘカヨウケレトヲハシヌノ方ヨシ

○昔ハ菓子ニ遣イレカ龍眼肉カ
ミナテ有ヨウナリ

○サスカニ平家也トキリ合ニ太平
記ハ風流ノヲト非レト也月見ノ

トモ平家物語ニナリ

○こよひ誰すか風をよび
して吉村の山の夕か

○嵐雪の合ハニ風雪

○今月見所ヤ九月望

わのいづつ文井の月を夜道

いさよひや龍眼肉乃の衣

上ニ文語ト

平家之左馬記に六月も見す

吉村の山あをせし

こよひ誰すか風をよび

まね世をよび

今月見所ヤ九月望

○下ノ弓張
○八九月腹一盃三月ヲ見テホ
カタニ皆晴テ九月望ナリ
○嵐雪句ト合ムケニ嵐雪ヲト
レリ

○毛詩

春女感陽氣而思男
秋士感陽氣而思女

○此語アレトモ取ラヌ方ヨロシ
○繩風乃心うこき如繩如繩

○虎宮

○職人晝ニ梵論ト有キケイヲ
スル日ナリハナリ想夫戀トモ有

○不聞

星合ノ淮南子ニ出タリ瓜畑
ニテ星ノ逢ト云俗言モアリ

九月廿七日の月を惜
見 月やたつ晴下九月望

不卜家日合

夕月や陰を感じて好屋の中

七夕や暮房よりひらて笛を吹

星合やひらく瘦地の瓜つくり

○雨後

鶴や石をひらいての橋もろ

星合や山里持て霧のひま

○新居

峰梢をけりてくさや浪河

天川けしのけしや一きり

踊子をこりていつく星北

源氏字治トシヨウニ作タリ
山里ニ妾田置キレヲ持トナリ
下屋敷ノ一零分ノヒマヨリナカメタル
ナリ按梅ヨキ句ナリ
○カケテハ旅ヲカケテト同シ
トナリ
○今日晒シテ置ルカ天ノ川ノ水
夕懸ルテ一レホリ又カタチモ似タ
○アマレキ句ナリ治郎ノヨウナリ
星合ノハ星北ト遣タリ大名
ノ伽十光

○刺鯖モニツ宛向合テ置シカ
 鶺鴒ニ似テ羽ヲカハセシトナリ羽ヲ
 並ハ長恨歌ノ趣刺鯖セタニ
 用
 ○枕物狂ト云狂言ナリ案梅甚
 ヲロシ笹ノ葉ニ短冊ナト附ル物
 ナリ
 ○白文憐家娘恨歳ニナレ粟
 ニモソカニ恨ト有丸太ノ高キ木ノ
 上ハ馬ノ留リタルヲ見テ作タル
 ナリ丸太ノ先トアル集ニアリ
 ○理屈モナリ風流ニ作タル句ナ
 リ星合ノ歸リ時分ニ成タル
 ○時ノ氣色言外ノ意アリ余
 情盡ルナリ

侍彦
 刺鯖も度百羽をうけり
 笹乃もに枕つけてや
 二星恨む隣のもよめ手
 かききや丸太の上よ
 星合や女の手を
 何あひや寝る

○男セタノヨウニ作タルナリ大名
 ノ奥ナト連行ヨウナリ
 ○大ク高ク赤銅ニテ作リ内ニ
 鈴アリサラテタニ高キ比叡山ニ
 雙林塔カ有ニ依テ月宮ノヨウニ
 聞ユ

○隠岐殿ハ伊ヨク松山ナレハ伊ヨ
 簾モ輕レ桐ノ秋トシテ美人妾
 ナトカ待風情有
 ○素堂母七十賀各秋ノ七種
 ノ題ニシタル句ナリ星ノカサ
 トナリ玉カソラハ髪ノ饒物葛花
 ニ角豆ノ蔓ニ似タル物ナリナリ
 俗セタノ夜角豆畑ニテ星逢ト

丸孺の治郎公
 比叡のりり
 星阿のや双林塔
 橋と成鳥
 七月朝日
 首花や角豆も

云ノモアリ
 ○京ニテハ小早踊ト云カケ帯ト
 ヲキタリ
 ○昔ハ小屋立テ賣レカ西國
 邊ナルヘシ
 ○鶴サキハ上手ニ十二本ノ綱
 ニテサキ横堅十文字ニテルナリ
 逆船ハ梶原カ古事

○櫛取ル曉起ノアカノ水

○管仲隨馬

小娘の生いさききししけ躍
 小屋涼 花火の筒のわし
 移さるさし逆櫓もや
 玉川のあな
 水汲の曉起やすまの解
 増上寺晚景
 鳥老ぬ灯笼使のなま

○鷺ニ傘サセタルト云フアリ
 ○行水ニ出ヨリモツカモナイ鷺
 傘ヲサスト云フ

○唐歳時事
 舩卯濕化ノ四生アリ

○五雜組
 婦人ハ宣子ヲ産祥トス

○唐ニテロマニテ人形ヲ作リ川
 へ入遊フセタナリ化生ノヨウニ
 レタリ
 ○一人ノ男有友ト酒ヲ吞醉テ
 寐タル時管用ニテ歸ル甚クシテ
 哀レニテ千金ノ珠ヲ襟ニ縫入カ

セタ
 行水ニ出ヨリモツカモナイ鷺
 舩卯濕化ノ四生アリ
 婦人ハ宣子ヲ産祥トス
 唐ニテロマニテ人形ヲ作リ川
 へ入遊フセタナリ化生ノヨウニ
 レタリ
 一人ノ男有友ト酒ヲ吞醉テ
 寐タル時管用ニテ歸ル甚クシテ
 哀レニテ千金ノ珠ヲ襟ニ縫入カ

遣タリ
○衣ノ裏ノ玉ト歌ニテ云六此古事ナリ衣裏玉和歌題

○遊山火ノ若ノ葉ノ影ヨリチラチラ見ルカ玉迎ノ火シヤト云フ
○于蘭盆経目蓮カ母ノヨウニ作タルナリ今テノセカキナリ

○無常ノハカナキヲ幽其ニシタル句ナリ
キノウ見ル人今日ハナシト職人歌
登三鉢多ノキノ言葉
五あふりくあハヤき湯の燈五

法の授記品の有無價宝珠
と説せぬ心をおもひて
衣ある五文字妙ナリ清不知居や玉あつた
宝珠ニ當ル

永代島よあそぶ
遊山火を若の葉の影にけや玉迎
玉あつた門の乞食乃釈と見
きのあしし人や隣のあそぶ

○未詳
○歸去来
○陌上塵

○千マタキ十文字ト云送り火ノ千
マタニ満テ定家煙十文字ニ似タ
ルトナリ

○難題十首 定家

大勢やおののけ乃橋りす
とまハ多きやの燈りありたり

○前巻外巻
○山東

得半酒
洞明の陣あつめや生才玉
相伝やほあろき此何れ此
見人おのり灯籠子ありたり

送り火や定家の燈十文字

千之と
黄染子ありたり

○伯夷叔齊カヨウニシタルナリ

○近江ノ辻堂へ奉納ノ句也東
西ト云稻妻ノ常ノ句ヲ上レテ自
然叶レモノ歎

○下五字宜シ
如露如電ノ心

○俳番匠

舍利講拜ミ 侍りしよ十如
是の心のおもひよせては心よ叶
はれと拾ひ出侍る 相トアリ

○ツレく草

伊セヨリ鬼カ出タルトテ京中ソウ

トウオコアリ 踊ノ崩カ似タルナリ
伊セ踊共云面白シ

○西國ナトニテ宵曉ノ舟シタ
ルヲ思イ合スル

○古今草

○金ノ光ニカケテ人ノ榮花ナトハ
カナキ無常ヲ言立タルナリ

○奈須ノ與市ナトノヨウニシタル
ナリヨロレキ句ナリ

○カツラヲ蟬ノヨウニシタルナリ美
人ノ髪ヲ抱蟬トモ云

○俳番匠

舍利講ノ休トアリ

多豆あをのたけり山方二人

宿つまやまのくさるふいあ

妻よおくれて好

あそりもあれたる人

いあつちや思おもひつゆも

伊勢の鬼入りふひつる躍り

ナリヨロレキ句ナリ

カノ光ニカケテ人ノ榮花ナトハ

舟真

カナキ無常ヲ言立タルナリ

奈須ノ與市ナトノヨウニシタル

ナリヨロレキ句ナリ

カツラヲ蟬ノヨウニシタルナリ美

人ノ髪ヲ抱蟬トモ云

子川 蟬ハ売ハるを思つゝもあはく
さし人 船雲山の烟くさくさ
○ 蟬ノ鬼灯ノ売レト見ニレモ
ツイカラニ成トナリ共同レ句觀
相ナリ思つゝやハ休マヤ也思フ
蟬の売ト云フ

○ 蟬ノ売ハ人ノ骸ニレタルナリ
莊子 寒蟬ハ春秋ヲ不知
○ 夜角カナリ頬カフリノ落タル
句ナリ

古今序

文屋康秀アキ人ノヨキ結キタ
ルカコトレスマイトハアラソウナリ
源氏卷柱ノ卷ニスマイタマウト
有
○ 菓子屋杯ニ有ル礎ナリト

鬼灯のくさくさを思つゝやせみのや

蟬の売ト云フ

悼コ序

其人の軀はくさくさ 秋の蟬

投らるる蟬をやりけはお撲

ト石やきくよめはてはお撲

よき衣のほいややあまひん

○ 居ト云モ家ヲ立ル所ナリ

○ 夜角カラ取テ汗ヲカキテ腰カ
ケタカ石ノ又ヒタルナリ

伊セモノカタリ

簞モ笠モレト、ニヌレトアリレト
リトヌレト

○ 京ニテノ句成レレ女ウレナリ荒
アラ敷物ヲ神ノ為レトテ女ニ
ウラセタル所面白レ

○ 小田原丁邊ノ句ナリ勢イノ
句也々裁面白レ晋ヨリ外ナラ
ス

○ 釜師ナリ銚西瓜山城モタタ鑄
ヌ形レヤトスレハ聞ヘルナリ金ノ鑄
ヘカ、ル山城ハ御銚師銚西瓜ト
云フアリ

仲のくさくさの女も賣やお撲

相撲氣を髪月代の夕うが

山唄りおの落ぬ形や銚西瓜

つ

つ

つ

つ

○大木十本木犀アリテ唐メカシキ禪林也六尺四人ハ俗メカシキトナリ

○頼政ノ雲ノマカキノ歌
幸清一人ハ卷繪師一人ハ鞍師二人共ニ名人懷古ノ句ナリ
雲ノマカキト諷ニモ有昔松トシタル所ニテ懷古ナリ鞍師ノ方歎

○雨後ノ風ニテソヨクスル所面白シ

遊弘福寺

木犀や六尺四人唐メカシ

中の郷より

幸清り雲のほろもや昔松

雨後二句

あそびくさ芭蕉よのうら

殊晴テ上云所ニテ雷ノ上リタル所

○殊晴テ上云所ニテ雷ノ上リタル所薺ハ哀ハカキト先作スルヲイサキヨキトシタル所妙ナリ

○薺ノ日カケカマタ残りテアナルヘレ朝顔ト中老女ノ顔トヨカケ合タリニ二十四五ノ女ナルト

○吉原ナトニテノ句欵橙花ニ日ノ榮ノ心欵未詳
いせせよりけ松未詳

○許由ガ瓠ヲ割レテヲカケ竹ハ卷付シ瓠ハ鳴モノナリ

○曲作ナリ中七文字面白シ

薺の日陰あつた中老女

薺よまきくさやあの方の物

殊のあやうきけり小松系

種竹三句

竹は許由の割つた竹

つるは鳴く

○牛遣フ所ナリ

此句ハ序歌躰ナリ

ツレノ草ニ
角文字マイトカケル也牛ヨミス薄ノナリ花薄ハ容形ナリ

○俗ニ岡釣トレタリ形秋氣ヲ思マルヘシ

○其袋

伊勢の國ニ降リ一ヶ所ハ開の地ニ宿トシヤ宿トシヨ宿トシ橋の善クありルハ

宗長法師

橋のくはせられてゐる
こけしも俳諧の枕よあはす
こけしも俳諧の枕よあはす
こけしも俳諧の枕よあはす

地名
長野 トヨケ 文政をやりて
角文字やいせの枕釣乃花序
還釣のししろあや秋のなる

○芦ハ雜穂ナリハ秋ナリ

俳諧ニテハナレ詩ノヨウナリ晋三三句アリ蒲ノ穂共有集ニ出タ

○蓼ノ花カ醬油ニミラミ逢也花ニテ容形

麻村ニ水車ノヨウノ取合

○夕昏ニアラス未秋ト見ヘタ

○秋ト云ト年トカヨウナリ

秋ノ夕ア裁ト云ホトナリニツニツ千ヲク残タル句ナリ薺ヲト口タルナリ

○末の葉

芦の穂や薺とやひて折せん

客至

市遠無兼味ト杜甫ト末若葉ニアリ

醬油及小庭の堺や薺の花

暮薺とつふを

朝霧よるあき年の夕

嘗のりもあつて俳言かし
と申すもなほその夕の夕
つたふ秋とつたあけのけし
あきあきの娘あきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

○未詳

下野ノ佐野ナレ

○論語

昔ハ吉原ナトニハ客草履トテ
有島原ナトニハ踊ソウリトテ今ニ
アリ淺芳源ハ吉原ノ向ナレ一寸
ト出タルナリ露ノ間ハ淺芳ノ露
ト一寸ト云所ハカケ合

○虫屋禁秘抄虫合ニ人々嵯
峨野ハ参リテ虫屋マテ思ハ又
人ニツレ立行トナリ爰ニ傾城ナ
トノ方面白レ虫商人ニテハナレ
○何トナリ田舎ヲ云立タルナリ足
アフルト上ニ置タル所面白レ

○爰モ詩ノ形也 嵐雪
ノ秋や酒羅より今秋の
雪

○新ニ秋ノ形也 嵐雪
ノ秋や酒羅より今秋の
雪

花をりし佐野の流乃草履
酔を乞ふる陣の草の花盛
三遠を納
早福酒や福存よひの焼か

雪の乃や浅茅糸へおる草履

頬榴やあかぬ人よ虫屋

野店無肴核薄酒甚活豆荚肥

足あふる亭まある周南峯カ白ラ感ス

酒買より雨おの辱糸ツ

浅茅糸よ

○隣ニ墓原ナトカ有テ人骨
杯ニ似タルヲ以上ハ化野ト置
タリ

○山奥ノ生木ヲ根ニ流落ス
ニ狼ガヌルトイモノカ笑レイ面ヲ
ニテ槎ニノリタルサマ
○今ノ茶船位トナリ
繪嶋殿ヨリニ挺立ニ挺立法
禁ナリ今猪牙
ヒンヲマク枕ハ火繩箱ナリ星合
ノ妻迎舟ノヨウニ作タルナリ
○清水ヨリニ丁程奥ニテ昔ノ
化野ナリ小督ノ局ナトノ墓
モ有リ片側カ松原ナリ

○柿蒲萄ヲサマシク作り爰
ニ年中職トス毎日一万疋宛江
戸へ賣ニ出ルナリ逢坂ヲ元箱根
ナリ作り江戸へ出タル駒引メ

化野ヤ焼蜀絲たるけの骨ハナリ

春日法樂

と我日秋の松浩をり以の山

四所の宮人おとにほの

成の刻を鳴りや〜侍る

野外夕虫よつふ題あり

蜻蛉や狂ひ志つるはこころ

相模川洪落水接天馬入川

狼の浮木よきや秋のふ

中ニ挺立の帰棹入るる松

髻を脱枕つるは星の露

修治ヤ松よるふひの清閑も

こゆしきの題あり

甲斐弱や江戸〜と挿おたり

ツラレ
○元管根トテ湖ヲ越テ向ヲ方
ナリ地獄廻リモノナリ甚ハシ
キ山道ナリ

○美濃ノ關ノ孫六志津ノ三
郎刀鍛治ナリカラ打音ノ砧
ノ音ニ似タルニヨツテ古ノ傳ニ引
當タルナリ

○乳母共ハ砧ニカルニ依テ子ト
モ等ノ寐カ子トナリ子福志ノ
ヨウニ立テアル長者ト書タルニ

○波菴摺
いますむ涼兔不向まま上

約多ヤ岩つら元管根

みの流り入り素牛ま

砧を人涼る志津を友

何る長者のもとまり

一中此百小祿母子幾人はん砧

和名新宅

ふき時ま了の日数四石生のこ
けをままては志まハ冬こ
めもとあひのいやしれ休む

○津ノ國住吉ノ近所嵯峨ナ
トノヨウニシタルナリ

○零雨ハヒタスラニ尾花カモノヨ
ト作タルナリ

○懐古ナリ眉茸ト云モナリ御
幸ノ跡残タルヲ櫛笥ノ眉作
リニヨス

○天智野ノ國ノ安心ノ人閑

さい植の音を仕まハ砧りか

奥好乃殿やうんの衣

志里小野の虫やはらりで

零雨ハヒタスラニ尾花カモノヨト

草や徳幸の何の眉つらり

あらりのつらり扇

あらりのつらり扇

○元管根ノ関ヲ安宅ノ関ニ
カリ用タルヨウナリ甲斐ヨリ出
ル粟フトウノヨウナリ心元スノ関
人ニヨト諷ニモアリ

○名所ノ女ハ悲志河内女賤ノ女

○大和柿トテ主方モテササレケ
ルニト集ニ詞書アリ

泊瀬女カウルニヨツテカニシニ買
フタルナリ

○愛宕ノ一ノ鳥居ノ前ニ清
瀧ト云氣色ヨイ所ナリ山川ノ

落合澁柿ハ瀧サント云ニ瀧ハ
附ルナリ我心ノ拙ク澁キヲ瀧ニ

附ルトレタルナリ

關守の心ゆるすや粟かまの

大和路の女子物いひて

泊瀬の女柿の志を思ひ

嵯峨遊吟

清澁や澁柿さしすま心

○言妙ノ句ナリ

○幽玄弊ナリ常ニイト思フ山
カ秋氣ニテ空ノ清リテ見ヘ富
士ニナラフトナリ

○幽玄弊旅ノ句ナリ駒ノ足ヲ
留テ平地ノヨウナリ秋山ヲ見
タルナリユルカヌニテ去外ノ意アリ

○隅田高橋之記
詞書未詳

○管根ニテト有集ニナリ

茸狩や山のけむりも虚病

め中の茸くりも

茸狩や鼻のえちるも

舟中隅田川

あいな山の富士も並ふや秋の暮

秋のや弱もゆるぬ鞍乃上

紅葉又女子待そすも

○素杉ト空トカ分テ空ノ清夕
此句幽玄躰

○駒ト云ニテ錢ナリ

諸鷄ハツカイノノト云共只モロ
聲ニ鳴トト云ニ依ルレ馬上
ニテ脇目遣イノ句ナリ

○史本集

人ト目ハハのあまりしし老
狐いゝも空のちろいふ
セモ

○狐ヲ人ノ身ノ上ニシタリ松
虫ハタクリニ鳴モノナレハ友モナ
ナレト云ニテ淋シキ句

○虫ノ聲ノ淋シキニ長咄ノ故
郷トトライノ出レテ何トナリ隣タ
故郷ノヨウニ成タルトナリ

○清見関平忠文

漁船火影寒焼山ヲ
驛路鈴聲夜過山

○箱根トトノ邊ナリ馬ニナリ行サ
マナリ

○迷ハナリオカラ山川ノ流ハケレク
落タル粟ハナレ

○タハヨ山畑ニ作レハスクニ于ス
眼前ナリ

○花薄ハ容形其ホトリニ有ル
レイセ彦ノ神ノ有三國ナリ神
風ノイセトツナク

望み高直
旅もも
舞かま
身か人
油
あま
い
ま
ま
ま

妹のうす尾上の杉をもる事
内藤臣
錢林航

諸鷄約ハはりせぬ脇目こふ

松虫ハ狐もえんれを友も

一葉おとせをうらうて

あつも隣もるこも
あま

すもや整字眼こもる茶

夜過山有集ニ管根トアリ

鈴虫や松のえへ荷をせて

山川也松子穂ハなまはる

きをこナリ山田の町ノ夕ふ

こ見よ

風... 賤ノ芋ヲホリタル跡へ猪カ寐
テ居ナリ猪ノ喰タル跡ニ寐居
ニアラス只何トナリ子テイル所
面白レ

浪聲鞭ヲ打ヨトレ
鱸カ權ノ急ニ行故ニ子上タル
ナリナリ鱸モ淵ニ青トノカケ合
○千ヨウケ院様御坐ノ間ニ車
ニテハコヒ持来ルヲ御疊ニサレタ
ル事

○古令
○嚴重ナル御城へ何ニ入マラト云
句ナリ女郎花ハ似合ヌヨウナリ
○日傘ノ句成ルヘシ萩ハ日ニ
當レホレハ物故御傘ト申セ
雨露トカケ合

岩の明山神風序

長谷城

廿三日伊勢ヨリ長谷越へ出ル丸
ヨリ檜牧迄重山嶮岨ヲ越ス
風景時トシテウツリカハル尤
奇絶ノ地トリト句兄弟

山畑乃芋何々何々依花々々
川芋のまき平あきまや谷乃丸
遠州二役川を河舟きて
りり竹ま推河豚とふ
逆水大切所をこころ

打櫃ノ鯉はまじり鯛の色

一夜前裁とらふ

師味つハ何々入やうをみ

切惣亨

日盛をゆ傘と申せ萩は汗

○真言ノ書寫ノ法古ノヨウニ
文字ヲ結合ハヤトナリ

○獅子舞ノ胸分ニ花ノ
カクニレト云フ

古歌ニ掉麻ノ胸分水鳥ノ胸
分ナト有

○續後撰

舞臺ノマシヨウノノ
掉麻ノ胸分ニテハノ
カクニレト云フ

高野ニ千リノヨク酒ヲ吞

萩乃武ノシノヤササ茶

曉松亭ノ子共タクサシテ人

獅子舞ノ胸分ニテハ

庭ノ秋

楓子亭

○鹿ノ萩ヲ妻ニスルト云フヲ萩ノ
花妻トモアリ鹿ノ為ニ妻ノヨウ
ナリト也

○大山和ニ業平舌跡有リ今
俗ニ云々ナルヘレ

○君居
あまそい
ハ信

あまそい
まき

井筒を略し
ます

いそ

田家

庭多の卯
あま

錢清流

○大和物語ノ芦刈ル男
清流ナレハ大和物語ノ裏ヲク
ハセテ妻ハ碇ニテ恨トナリ夫ヲ恨
フ詩歌ニ有リ尤古郷ハ難波
ナリ江戸ヨリ立身ニテ歸ル時
ナリ

○琵琶行言葉四ノ糸調大弦
ハサツ〜トレテ村雨ノユトシ
柱ニ鷹ヲレタル機面ニモ鷹有

○曾我物語太郎二郎ノ貝有
吉野ヨリ入カ逆ノ峯斗ナリ
中道ニテ別レ熊野ノ跡ヨリカ

ケ出ルナリ

朗詠古寺

イラカ破レテ寺ナレハ子タナトカ
落テ澁紙フム所モナキトナリ

賤機山

御番衆ノ足輕ナトノヨウニ作
タルナリ

○御傘ト申セニカケテナリ
昔鞍ノ萩摺レタルナリ傘ナトノ
ウツルヨウニモ見

芦刈のうらみと恨せて碇に

隣家よもと結くを

大弦ハ晒ハ元結ノ存スル

元結眼字のゆるるは虫の聲

太郎二郎の貝有

のけ出乃貝もてあはれ

芳香月灯を憐

古寺や澁紙あま人所ふ

駿府や番衆あはれ

うりまは機もろも木洗桶

同仙石玉斐ふ所かあはれ

萩よりや傘はうらみ昔鞍

あはれのは

○三粟ハ男方中ニアリテ両方ニ
女ノ有ヨウナリウナリハ女房ノ
ト上ニ居ト云フ角カツキハ衣
ヲカツキタルナリ

○此歌三番ニテ作り井薄ヲ
ヲ結付タルナリ静ト云所面白

○松茸隠題

○拾遺集物ヲ名松茸
あし引乃山下ふよぬ
てその大まのり衣あふ

松ノ葉ニ其火ト附クナリ薄醬
油ニテ句ナリ

○鶉夜ニ裾短レウツル尻全
千カモ故ナリ形書ヲソノマニ云
立タル句ナリ

○人家ハ鷹遠カ飛海中ニ近
ク飛フナリ舟中ニ見タルナリ

○山端ニ遠クナキ行ナリ並行ハ
鷹ニヤカ扱モ聲ノ遠サトナリ
白雲ニハ羽打リハト云
ノの態ニミヤル秋のそめ

花子花太郎

三粟のハナリ打角被

大和十井アリ
在系寺

僧口キの志つり手むる
るる

松のそめその大足しけ
るる

品川延釣

感微和書よ

そそ打や新衣よ

品川延釣

厚の服見送る

白雲のそめ

○赤子ノ頬ヲ吸折シモ鴉ノ啼
 以ト作タルモ頬ヲ吸音ノ似タ
 レハヤシクモ作タルモ作タルモ
 ○鴉ハヨリ入語ヲナスナリ人ノメ
 マスヲスルヨウニ作タルモ
 ○鴨ハタアニ立カ哀ナリ泥亀ノ
 立ヨリタルナリ笑作タルナリ淋
 丹深ニシテ
 ○曳尾ノ莊子
 ○木ノ葉ノ先ノ色附ナリ女
 ホレトシタル所アハハイ大事ノ
 所ヲヨリヲキタリ

わすめ舎をめぐり
 鴉啼や赤子の頬を吸つる
 吸檢ふとす語や百舌の聲
 泥亀の啼は這うもつか
 鈴が長上る 晋友ナリ并先品舟
記モ今所持
 枯も花の枝や女を

○法華十如是ト云ニ子山ハ
 菅根
 ○富士大鞍ノヨウナリ歸リサマ
 打トナリ
 ○霄暗カソノ月ノ出ニヨツテ
 霄ノヨウニ見ユトナリ言外ノ意
 ○夜ノ更テ有ニ誰カ御意得テ
 鹿ヲ聞フヨト云フ
 ○鹿ノ聲ノ細キヲ流ニ傳テ来
 文ルカト云

ぬ是果のこころを
 二子山二子ひ泣く栗のう
 尾州浄教さまで
 意もおちのほろみううて
 霄闇や雲のけしきよあ
 鹿の一歩とてふふ
 更にも誰か御意得て
 鹿の聲
 流

鹿ノ聲細流ノ耳ニ入タル
○氣色面白

○木ノ根ナトニスカルヨウニ鹿ニ取
附セタリ

○杖ノカレノ木ニカケテ置タリ秋
葉ノ麓ニ杖ナケ里ト云所有ヨ
シテ草ナク吹風ナクニ山ハ

木止木止マテ

門立ノ杖ノハ門立ノ杖ノハ男唐男唐ノカ

小系女小系女ヤヤおおままああててししくく若若ノ尻

秋葉禪定秋葉禪定の時

合合羽羽着着テテ若若子子すすくくややししああららななくく

下山

一一ノノ杖杖ヲヲ投投テテ流流ルルトト思思フフ

○秋風秋風子子朽朽テテああららままきき
素素ノノ杖杖 〇初初セセ墓墓ノノははふふてて

〇ママヤヤモモノノセセロロハハ墓墓ノノニニハハ

〇芋芋ハハ子子ノノ澤澤山山有有モモノノナナリリ清清
盛盛ノノ這這アアホホトトニニヨヨリリ心心アリアリ翁翁ハハ
懸懸テテ芭芭蕉蕉ノノ秋秋トト置置タタリ

○秋葉秋葉ハハ子子ニニカカケケタタリリ源源氏氏秋秋
好好シシ中中宮宮ノノヲヲララ文文字字違違井井テテ心心

芭蕉芭蕉ノノ荒荒蘭蘭ヲヲ悼悼ルルトト思思フフ
未若葉ニ

嵐嵐蘭蘭一一子子孤孤愁愁ヲヲ何何モモ思思フフ
嵐成

芋芋ノノ子子モモ芭芭蕉蕉ノノ杖杖ヲヲカカククカカ

めめちちももししつつははししててはは比比

子子たたののももももををああけけししててはは

おおのの地地ハハ思思ふふはは子子ノノ杖杖葉葉

二持タル欵

○紙帳ヲ張テ籠居タルナリ

○狂言作者

大雲寺邊ナルコト

○清水ノ坂ナリ俗此所ニテコ

ロ六三年不生ト云

○産寧坂ヨリ半里斗行テ鳥

南都

二月堂よりりりりりりりり

断食の僧堂のりりりりり

行か丁急をあつて

目目目目目目目目目目目目目

狂言ノ道具師

甚五丁急をあつて

以風信狂言をせもつりりり

産寧坂よりりりり

邊野ナリニハ助字

○村柵ハ取合ニ置タリ荏ノニ

油ニ取モノナリ大屋敷ニテ賤家

ナトモ有テ荏ヲ于スナリ

○柵散マレヘテ疊ノウヘニ上タルナ

リ御所ナトノヨウナリ翠簾ニ掃

セシ所妙ナリ柵散冬秋ニ作タ

レハカツクルソト云カ妙レ

○聲モ立ヌ所ナリ

深山ノヨウニレタリ柵ハ深山ヨリ

始テ花ハフモトヨリ咲初ル

菊如き花を色色に

戸城山庄

目黒今細川ノ下屋敷
昔八五十三次モ有

むらむらむらむらむらむらむら

うちうちうちうちうちうちうち

あちあちあちあちあちあちあち

あきあきあきあき

あきあきあきあき

○三條ヲ渡下リノ氣色旅籠屋ナトモアリ

三條橋ヨリ都ヲフリ返ミレハ寺院ナトモ施ノ色ヨキカ都ニ片腕ノコスヨウニ名殘ヲレキナリ

○平家物語高倉宮ノ紅葉ノ所カレラニ林間ニ紅葉ヲ焚ト云ヲ誰教ケントアルヲ施ニハト作タリ

○木化ノ神ナリ物ハ女行ヨリヲコレナリ山ハ流スヨウナリ佐保姫斗スムナリ

○高山難路ノ所ナリ初テ見ヘタルナリ真向ノ馬ノヨウナリ作方宜シキナリ

○高尾ノ施ト云ヲカクシタルナリ今文鶯ノ塚ナトモアリ一山カ施ニテトウモナラヌヨウナリイツソコロセト文覺ニタイシテ云荒々シキ法師ナリ句方モヨシ

○無類ノ句ナリ貫之ナトモ阿吉久曾ト言シ時住タリ兜ノ立ヲ公家ノ子連ト置タリ

○道役ニ施ヲ掃セシ所面白シ

三條橋上ノ氣色

腕ハ都ノ色ヨキカ

あゝ人の心考ふ

紅葉ハハル教ハハル海ハ

山姫ノ深ク流ハハルみち

宮根ノ上ノ山

松ノ上ノ山

高尾ノ施

此秋文覺家

泊瀬

松ノ上ノ山

山行

道役ノ施

○朝熊ノ柘ハ施スルトモ有哉
未詳

○小倉ノ山莊ノ句巴カ身ホ
トノ山ノ奥ニ菴ヲカマヘテイハト
ナリ實(身ヲカケテ庭ノ手水
鉢ノ元ノ南テヨウニ作タルナリ
三句共ニ画讀ナリ

○實ヲ包ハ時候取合ナリ

○小倉ノ山莊ノ所ノ画ノ句ナ
リ冬ノカマヘト同レト

○高野ノ山ノイニモロシクナリ

いせよ

紅毛ノ柘ノ施スルトモ有哉

南天の窟を包めと存の影

南天や社をりほゆる小倉山

松の山乃繪ふ 王佐カ画ナリ今
ニ是ヲ寫ス

○伊勢物語笈ノ角ニノカ、
リシニテサリカレトシテタルナリ

旅思

卯句

○是ハ田家ノ句ナリ

○サレモニハケレキ大川モイツレカ
ハ九月ニ成ルト水カレテ稻ヲ干
ス川ト成タルトナリ

子共ノ云葉ヲスリニ取テ作
ルナリ山中ノ蜻蛉ヲ笠ニテ追カ
ヘスナリ

雨後楓子ヲトヒテト涼石ニ

アリ

○唐柜ノ上ニ越テ香ノ流ル句
ナリ張良ニハ有マシ

笈の角指の苔もまじり

七十の獨もそそり鳴る

いつらに稲を干しぬや井川

山の端をわんざらすや破れ笠

水郷 詰題ニ所不所 是ハ詩ノ題ノヨ
歌ニ三十七也 宇治
ウニレテナリ

唐柜を流る水やぬる

不二ヲ素羅笠トモ云

○富士ハカリシレ雲ヲ笠トシタリ
不二ハ晴子ハ面白カラヌ

○朝霧ハ飛物ナレハ夢ノ寐覺
ノ飛ヨウナルカ不二下風ニ覺タ
ルナリ夢ト富士ノカケ合幽玄
ノ句

○梁ノ武帝

○キヨウカル我カ旅姿ト前書
アル集モ有

○ツクヒキスルニ諸鳥不來已カ
姿ヲ笑フ淋レキヲ言立タリ已

カミ、ツクニ成テ已ヲ笑フ

○旅思ノ心ナレ晋子例ノ句ニ
ミ、ツクノ為ニ遣ハレテ頂巾ヲ
ハカ縫トナリ

○本多下総守トノ御侍宴
花薄ハ色ヲ取タルナリ子方ヲ
見出シテ作タリ

能ノ時子方ヲツトムルヲ云
○此句旅思ナルヘウツノ山ノ十
圍子ナリ

○奥州ノアヲミスリナリセツ所ニ
屋敷大クヲフライノ人ヲ通ス行
又ケノ庭ニテ菊畑ノ有平地ニ
出タル句ナリ青山邊ノ屋敷也
○色ヲ取合タルナリ穀ハ黄ナルモ
ノナリ

富士

笠取

朝霧

武帝

旅思

秋

みづくの路中人の心

召したる列一。子方や花序

枯やるも 餘るも づつ

後園 奥庭ト同レ

いさねけの庭や澄ぼるもの
子の内乃穀こりてきこれ

○管根ヲ下リ来ル句ナリ山清
水ナトニヌルヨウナリ菊ヲ二鳥ト
云カケタルナリ

○菊者隠者ノモテ遊ヲ物ナレハ
ワヒタ物道具ナト何ナルト云
ナリ宿ト云字道具ニヨク合

○大器ハ盃ナリ菊ノ酒ノ手際
見セントナリ風流ニ作タルナリ大
器ト置タル所ニ賀アリ

○菊小袖ト云ナリ有
○菊小袖ト云ナリ有

○ヨイ句ナリ水ノアフレテ瓶ヨリ
流菊ノ香ノ水ニ添テナカハナ
リイサキヨキ句ナリ

○白鷄ノ黒キフカ出テ碁石
ニナリト云菊モ露ニテ白イ
所ニ星ノ出タルナリ

○菊ヲイタワル句ナリ
○残菊ナルレ九日雨フル句ナ
シレコハ誰カ為ニ雨ノ昨日ノ
残り袋菊トナリ英ノ袋ノヨウ
ニ成タルナリ丁子ノ根子ナリ

○昨日ハ節句ニテ一日吞明
タルニ又十日ノ菊ニメテ酒ノ

旅行

駕籠ニ濡テ山路の菊を二
りか

去ほりしき乃何何
菊の菊

尾張ノ連中

荷合ウリに去る人

土室のふきハニせ
菊の菊

ささの菊小下
好

きくのまや瓶より
菊の菊

白鷄の碁石より
菊の菊

雨重し地は
菊の菊

こは誰か
菊の菊

素堂
菊の菊

は菊の十日
菊の菊

亭主カ外ニ出来タルトナリ

○繪事後素

○菜苑十六跡カマハラニモナイト云テ富貴ナル句ナリ

○末秋ニナリテハ菊栝斗アルモナレハ菊栝ト置晩秋寒キ也菊栝ハ水ニナクサメノヨウナリト云句

○山玉祭ノ時昔ハ大母衣ヲ出タルソレヲ押モノナリ其根

かほくは十日の女にのりて

ましく白く蒼ハ後ふくはる

菜苑

菊を切記はつゝもあつかり

水鼻よくさめくろり菊栝

痛起 紀伊國屋文左衛門
千山ヨリ菊ヲ得テ

大母衣乃ふせりちおや瓶つ若

大瓶ノ菊ヲ押ト作タリ

○門酒ハ説フテ人ノ買フナリ詩ノヨウニ作タル句ナリ

○御師ヨリ太クノ歸ニ酒ヲ送タリ春ナレハ重箱ニ色

ト折入ルモノナレ共花ナレ幸ニ野菊カ咲テアルト云

○不知

○不知

三つめて重陽

門酒ヤマ屋の徳乃まきも

宮川のりり酒送せて

重箱も花あさ時の野菊

みちのせのとも乃名も

の色も

○イカラ我七百年ノ菊ニシトテ
師走八年ト云カ如シ

○上野宮様ナリ

○上野ノ役者ニ出世者ト云有
ソレヨリ手入ヲシタルヲモテイタ
ナリ

○隠逸故ニ咲ニマカセテカマハヌ也
結フヲツルムト云

○時服藏ハ菊重ヲ入ヲキタル
カ藏ノ廻リ頂ヲ結レタ菊ニハ
菊ノ籬ニマト云フ

○觀世太夫トモ置レヌ故殿ト
シタリムスコ殿トト遣フ輕キ殿

十月六日

十日ハ菊ノ御精進日ナリ故十日ノ菊
見ヲ菊ニマクソクシタルナリ

○俗ニ云カハ、六有ルマチ

小笠原ノ産家ノ所ニア、ト所
見ユタリ花ノ第菊ナレハ女
ノ子ト云ヘカケテ花ノ妹トシタリ

○内裏ノ宴也殘ト云字ニテ十
日菊ナリ

トフソ
以テ我七百の師走菊は

竹苑のやまもあきま

うつとあうと花奇あつと

出世者乃つとあうしつと

翁はひの文むと伝せ

時服藏菊とハきく此色ハ

十日菊

觀世殿十日の菊をのりて

女子を祓りひて

かよ尿よりうらむの妹ハ

十日菊

震宴の妙ももか菊脛

○笠重吳天雪
香芳楚地花

○ウツセ貝也菊ハ酒ニモコン有レ
ハニニセントナリ

○大工ノ年ヨリタルカ神代ヨリ今
ニ残り居タルヨウニテ目出度ト
云句ナリ
往古ノ歌ハ心モアリ
伊勢ノ御神事九月廿一
日十六日歎

○我身ノ秋ヤトカシタシレタル句
ナリ

○古殿ハ外宮ノフリタルヲ日ハヨ
ク晴テ居ニ神鏡ニ此方ノ心ノキ
リカクモリテ向ワレヌトナリカニ
ニ零カツクモノナリ

○菊フ黄ト小判ノ黄ヲ合タリ
○白川

西行の國に

菊を著てつちささるる

袖の浦とふ見つく

白菊を貝の穴よせん袖の浦

西羅那波屋丸郎たきつる

大工連の久しと秋や沖の林

徳言よほあてをりて

御極を取て爰に

内宮

身の妹や赤子もいさよ

外宮

日ハ晴て古殿のまの

いつはゆり

たてや小判あつて

老のふ

○白川殿ナリ
祭主ハ神祇太輔大中臣ノ兼
ルナリ御齊ナトノ日ナルヘシ花
薄ノ送ルヨウニシタルナリ

○空ヲ鳴鷹ナルヘシ外ノ物ヲ
ミタルカ大勢ニテ持タルカ百足
ノヨウナガ行ヨセタリ

○露ニニ六舛入テメタツトナリ

○福原ヨリ却ヘ返リ来テ福
原カ寂シク成リ鶉カ立ヨウ
ナリ 体ニ作タルナリ

イセ
津川

花

冠里

初宿

周信

白

琵琶法師ノ語りタル句ナレ

鶉立ハ一時ニツイト立ラ云

○鷹モ連ルモノナリ 同道ノ連故
ニメツラレイト云フ

○田ハ雑田守ハ秋ナリ田守ノ
宿ハ稻塚ノツキタルナリ田舎
ノサマ眼前也是ハ晝休カ

か
福原林

元禄

石川

忍河

と

稲塚

後

○月ヲ見シ為ニ先東ヲ問面
白シ

○景色妙

○セツ所ニ段々カ、ルニ依テヒロ
イレ粟ヲ握ツテ行ナリ
○カ、ルナン所ニコノヨウナル枹モ
有ルモノカト云フ
下枹ハ松岩根ナトニ有ラウ
作シタル

○山中へ提シ茶瓶モ山氣ニ
ナレ侷ナリ

○驛路ノ馬ノ薄ノ穂ノヨウニ
風ノフキトルナリケモノ、尾ニ似
ル故ニ尾花ト云フ

○昔ハ海中ニ一ノ鳥居有ク
ルナリ
○鎌倉社人ノ家ハタコヤマモス
ルナリ

○内ノ下男ノ下女ト通シ持シ
子ヲ其舎ニソタテヲメラ庭
子ト云母共ハ砧ヲウツニ玄子

宿より下東を問ゆる月

大山海道
いせ京

よきや雑く乃若麦畠

後句松ありて

生栗を握眼字はゆる山落

大山 大難所

無押やゆる岩根乃かみち

石蔵す。茶僧 大山ノ宿坊ナルニ

手よ提シ茶瓶やらめて

二間茶屋より同所

白雲の尾髪よりひきか

コレ見横切鎌倉へ出ル

由井りばり

新雪乃一のきぢやはのおと

雪乃下まきりて

砧うつる庭を茶乃はな

ノ筆ノ給任スルト云句キヌ板
ト云ハ舎ニイテモモモ
以テ思ハテ大イ魚ノ昔

○鎌倉三代ノ頃ノ懐古ナリ

昔ハ新中ニ一ノ島ノ百

○新米ニテ作タルナリ 歟ニテ糶
ハ切ルモノナリ 仏キヲ立ヨウニ先
トルマドレタリ

○空寐入シタス者ヲ起テ合ヲ

レヨウカト思フ心ナリ 夜寒ハ秋
ナリ 夜マ寒シレトモ冬ナリ 余リ
長夜ニタイクツシレテ空寐入レ
テイタルニ寒リナリ 合モシタシメ
ントウテモ有ト云心

○丹温麵の下焚キテ夜ニテ
ワルシ寒ヲ知ト云句ナリ
松風流ルヨリノるる 螢の
家松の本柱ノ味ノ極夜ニ
さこそと思ササ大いあり
所ニありとあれ

○秋の田代及古ノノ
ヤカテ流ルルヤカテ

羅尼尤乃古樹のめとて

有 一代の供奉の廟中廟ヤチ

酒屋敷
横儿追悼

一鉢をよみ向ふとヤ新糶

酒の洞を切部ナリ 丁若

一字を探る中ノ園と

あいせたるおとほし丁若の

空寐入

自画鷹

片足ハヤツトノノ小田の鷹

外夕者カレヌフリレテ見テ居
カ秋ノ淋レキナリ田舎ノ秋情
アリ

○凹凸窠先生

仙客來遊雲外巖
神龍栖老洞中淵
雪如紈素煙如柄
白扇倒懸東海天

石川天山

○晋子自筆手紙

清秋子所持

白雲埋絶頂

白雪の西より来や
丈山白扇倒懸とハ
てる人あはく見届き

秋のそれ裡のあはく見届き

白画

白扇倒懸東海天と

白つまはりしきと

てる人あはく見届き

せきと

丈山白扇倒懸とハ

あり拙者り富士いしき

さかしくれしと普賢富士

薩のえりしとあふののき富

士白象の跡し形容るるを

く秋航子の曰唐繪も言

ふて多と作て唐子の遊

戎の巻物しと

上山ありけりて發句あは

りしと

キ角

潘川

栲物あり

古文

秋風起て白雲飛ま下も有
西へ金氣手白
見送りて行衛ナリ白雲カ

又さかしくれしと

すそといを人も後句なり

と

白雪の西より来や

普賢富士

本朝令

白雲

白象ナリ
江口謠
光下共ニ白雲ノ白象ニ打リテ西ノソテニ行タマフ

古今

敏行

久しきの石のよまて見
るハハのちつとまよとまよのやま
ふれぬ
是ヲトリテ鐘樓ニ行ニ階子
ヲ登ルナリ立テ見ル菊ハ星ノ
ヨウニ見ルトナリ

未曉吟

鐘つき子階子も立て
白雲の西に
女人ノマノヨウニコレハ青樓ノコト
洞房の茶屋も元々
女ノマノヨウニコレハ青樓ノコト

○美人ノハケル足駄ニテ作レル
笛ニハ鹿カヨルトツレク艸心ヲ
取テ傾城ナドノ塗下駄ナリ二
十五ノホサツモ心有リ

○善人ノ死タル時ハ天氣モヨ
イト俗云ナリ此人ユヘニ二百十
日ノ荒モナイトナリ

○源氏総角卷ニハノ宮ノ名香
ノ糸ヲトラレレテアリソレモフマ
ハレヤ
○名香ノ糸行香楓三四ツ隅
ニ結ヒタル糸ナリ河海抄

笛を好けり

とつとつや笛の為ハ塗下駄

悼朝叟

昔人ハ二百十日ハあれ

吉田氏

唐柜も糸を生れり
白式

花鳥ノ説サマノ香ヲ紙ニ包テ五色ノ糸ニテ結ヒカケテ佛ニ手向ル

○星霜ナルニ

芭蕉ノ印ナリ別号ナリ印ヲヲサンテカス辰霜ウツリシトナリ入

○夜ノ鶴

美入

芭蕉為十三回

辰ノ鳳尾ノ名此

朝陣

宝永三戌十一月廿二日

妙名童女

石ノ露

○高砂ハ謠友成ナリ

○女躰ナレハ御留守ナサレニヨツテ申置タナリ

○額ニ何殿ナト、大家ノ卵塔ノ前ニ有サ丁ハカリノ間石大鳥居アリ

○黑白片日カハリト云句ナリ村時雨トカ、ル夕ト来ル時雨ノ晴レ跡ニ

神ノ丹

高砂

玉津

卵塔

花表

神

鳥居

時雨

遠寺ノ鐘ノ聲ノ聞テトナリ
 閑夜ナリ
 キホウレナリ橋ノ邊ノ柳ニ時
 雨ノカヨウ句ナリ
 源順和名抄ニアリヒシキ
 ○義仲寺ト深川長慶寺ト
 同シ舟路ナリト云句
 時雨ヲ泪ニ取合
 湖土吟膳所本樓ニテト俳
 番匠ニ有眺望
 ○金閣寺ノ大井楠ノ一負板
 ニテハ間ナリ

阿彌をけしとて
 空のや慈臺乃片柳
 芭蕉の三四
 志くろくばも舟法と墓系
 帆の舟の堅田の
 遊金閣寺
 大和の楠の板を

○鷺ニ蓑モアリ

○三輪ニ近道ト云アリ歌ニ古
 道ト言フアリ
 ○枯尾花ニ冬ニキトウノ句アリ
 ○朗詠
 天津風次井此浦のぬる田
 香のあつとを井山ゆき
 るしき

蓑をきて浮丁を
 大和めくりせば
 むらさの三輪の近所を
 芭蕉の病床
 次井より香をまき
 釣柿の夕日をかたる此れ
 飼猿乃引窓つらき

○人ハ我ヲ身ニシ我ハ人ヲ身ニ
スルナリ
○三餅ニ並置イニ
○當院ニ夏止マテ

時言くは解也のこて村壽
 一れもつちるよあ
 河のるこりあれ人よこ
 一しや當麻さおくのめん
 小松のこ人まに
 當院當麻寺よ天室什物さるふ
 中よも小松の法然上人ま
 一しやあひ松の石ま

○琵琶ノ柱 琴ノ柱
 ○箱の上の馬蹄とくは硯
 ○ゆるみ乃形容とみ
 ○松陰の硯よ息をきく化か
 ○世ささよりいりの海を
 ○見やりて
 ○三尺の身を西河乃くは
 ○融本多総公平は存り夜
 ○むい角をひびかかゆりの

箱の上の馬蹄とくは硯
 ゆるみ乃形容とみ
 松陰の硯よ息をきく化か
 世ささよりいりの海を
 見やりて
 三尺の身を西河乃くは
 融本多総公平は存り夜
 むい角をひびかかゆりの

○連歌
守山のいちこもつき成り
くりさきふさうり
守山ノ子ノフルトアリ人テラク
ト見ユナリ

○京ノ大家ノ女房共ノ十月
ノサヒレサニ揚弓ヲ射トナリ

○冬川ニテ酒白モ橋ト成
ヘトノ句 鄙ニテハ冬斗橋有
川有
○大名方ノ留守居ヘ言カケ
タルナリ

○句
廿九日
雪峰よまきり燈籠角谷成
つんで山の家
さく西よ木成伐る言来
院のまの心
よこと寒雲繡盤石と云
句よも
お比呂尼の末
嵐雪

守山のいちこもつき成り

編蝠や柱を捨る

守山の子もり

守山の子もり

三日月のおく

揚弓よ名のる女やり

神の旅酒勾ハ橋ハぬみり
家ハ乃るも信ハよるハ大社

大和つり

つりよりの城の寒

使者獨書院へ通る

利牛
著者切平乃物もあきき
三句ハ句合翁判ニテ利牛勝
ナレトモキヨシ

枝折萩古代ノ歌

○丹波ノセノ郡久跡ノ店ヨリ
代々献之

○丹波ノセノ郡久跡ノ店ヨリ
代々献之

越前門跡

井波門主應心院殿 浪化

二集多々あり

風や沖より

何りの家平て
沖流に戴乃とあきき
紅毛の下船も何らんあめ
言猪とぬ祖文のうらむ枝折
く強の若代へのあめ
つゝ綿の兔の耳を引く
大町新宅
名仙や鏡ついでの小崎屋

○水仙鎌倉ノ名物星月夜
名所十レ共是ハ夜ノ星夜ナリ
狐ノ尾ト見付タリ

○北松南橋のたゞのこゝ
又リ醫者なれば術を習ひ予
ッ俳諧を言ふハ白成つふ
やく三辻のこゝこもため
一ハハあゝあゝあゝあゝ
列ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ト末若葉ニアリ

○鮎ノ句ニテ秀逸

水仙子粒を以て星月夜
風平水清けき如月の尾
松人おらゝゝゝゝゝ

父リ醫師おれを我も

鮎汁よ又本州の味那

○下河原祇園ノ林ノ脇古手
ナリ昔料理茶屋ナリ

○催馬楽

我家ハとぞうてゝあゝあゝあゝ
と大君たままさせ奉りあせし
着ハ何ぞぞ人鮎さゝあゝあゝ
せよぞん

ヲモ戎 且那ノ句ナリ

河豚あゝゝ水のさゝや

日本鮎の藤魚サタヲカはく白冬を

表戎十九日ゝゝゝへん

大黒のうせゝゝ家まで

酔はめて大黒お人々ゝひす
やあ板甘小判授り美溝

○嵯峨ヨリ都ヲ思マル句ナリ
 ○純汁ノ大根斗ヲ女ハ喰フトナリ
 ○純ハ笑フモノナリ夷ト純トヲ合テ鯛釣レヨウナリ
 ○生煮フクヨク煮ハフクト汁ト截レ句ナリ
 ○聲舅ハ中ノ口ルキモノナルヲヨスハ笑ハレトナリ
 ○對且樂
 ○昔林野茶屋ナリ
 ○不阿忍新園ハ林ノ隠古ナリ

大系海十右衛門の宅にて前
 嵯峨山や都は酒乃戎か
 人^{字眼}妻ハ大根はくを純汁
 打盞ハ純も互ひの笑ハ
 生煮とろとろくろく
 世中ハ舅をよめぬと汁
 日本ノ風呂はと一比較山
 かけぬの浦打あつて

○つけかのうらふ出れも
 大綱引る夫なる菟の若徒
 者まうりふ走つてカを添て
 とまみけるト句兄弟

純いよとろとろくろく
 綱引ハ
 幻住菴にて
 雑名ノ名とろとろあそむる
 蘇汁や茶のあつてもとろとろ
^{晋子祖母}
 宗隆尼みゆりあふ
 千那よくして望田
 婆よをよとろとろ今世の茶

○渡ル者モアリ

古今 小早
見らるる我をさうして
きくねをわかれりて
あつさり
筑広近江 未解

○タラス所歸り花ナリ

○揚由カ柳葉ヲ射師ニテ
西行ニ言カケタリ東日記ニ
憲清法師鶴岡ニテ朝頼ニ
弓矢ノ道ヲ傳テレトアリ

○
○
○

蜜の刈薙かりしゆ さうりくしん

秘蔵るる鍋のり あつたけ

純けや花さの いさ

さつさ いさ

柳さくさ いさ

霊山のみち いさ

○狂言うつる猿

○狙吏ノ唄
舟ノ中ニハ何トヲヨルゾ

かきさりの いさ

生 いさ

柿の木乃扇 いさ

嗟 いさ

口 いさ

津 いさ

信 いさ

初 いさ

○冬ハ日ニ千カク高夕著ナリ
木ノ枝ヲ照カ落葉セシ冬
木立ノ枯木ノヨウニ見ユ言葉
キヨク幽玄ナリ

○冬々木立ノ中ニ二王ノ立句
ナリカラヒタルトツクリレ所面
白レ三井ノ景色ヨリ此句ヨ
レ

○大橋小橋トテニツアリ橋ニ
タマリレキリヲ吹拂フ渦巻ヨ
ウニ見ユ

○頃レモ十月頃ナリ君ハ翁冬

枯ナレ共立タルニ依テ春ノ日
ノ花曇ノ空ノヨウナリ花見
ニ行人ノヨウニ作ル曇ト云見
送りノ字ナリ翁ハ月花ニ富
ハナリ

○霞ニ千カラヲ入テレタリ青葉
ノ霞モイツカ枯葉ニナリ霞モ
霜トナリタルニ

紙子ハ隠者トノ著モノナリ

○紙子ハ隠者トノ著モノナリ
縫カハ紙子ニ付テ嵯峨ノ寂
レサヲ咄出ス風流十九句ナリ

○懷舊ナリ

芭蕉翁舊艸
冬ハ
枯木ノ
附日

園城

白木ノ中ニ王
三井ノ二王ヤ

大橋小橋ノ
渦

芭蕉翁
送

冬枯
途ヤ
字眼

石菖
の
花

紙子

紙子

紙子

○老人ノ床ノ内ヨリ支度スルヨウニ作タルナリ
 ○俗言柏餅ナトニシテ寐タルナリ此句ハ句ノ至ナリ余人ノ不及所ナリ
 ○三十過テヨク老始リテユルサル、此句四十三アラス

○紙子著テ川ハハマルト云セコトワサヲ直ニ作タルナリ大井川モ冬ニナルト水カレテテキルモノヲキテ渡ル瀬アリトナリ
 ○男哉ト置ソウナル所ヲ浮世トシタル所面白シ

○夫ヲレタイ寐急ル聲ナリ山鳥ハ峯ヲヘタテ、メヲ寐ルナリ
 ○冬、夜ハ冬、至ノ前夜ヲ云ナレ共スヘテ冬ノ夜ノ句ナレハ吉原十歩ノ内ノ句ナリ源氏夕貞ノ卷ニ田宅ワサト咄セシト有上五文字宜シ
 ○冬、ハ人通トトモナリ月夜凄キヨウス有
 ○二冬、居テミタレハ静サモシレテ感シタルナリ
 ○竹ナトヲ植置ヘキ所ニ炭俵ヲ置シトナリ
 ○冬、籠ニテ新宅ノ意アリ鼠ニモ馴マシト作シ所ヨシ

起出テ子ヲナシキヤ
 寤ルヤウラカシクハ
 紙子著テ〜市
 長途狂侶吟
 安るまで流る瀬ハ有
 十井川
 自頃より〜市
 浮世

山鳥の鳴る聲
 何となく冬夜隣をゆく
 草木ニヤ鏡のまじりて
 東さや二冬あきて京乃夜
 新宅ニウ
 竹の場乃小庭ハ炭俵

○納豆汁ヲサマサヌ爲ニ袖ヲラ
ホウナリ精進トトノ躰ナリ
あけあけ浮世の民よあは
れ我立杉トトモ深乃袖

○嵐三右衛門ナリ霜月朔日
ハアチナ冬ニ籠シマト昔ヨリノ
例カト芝居ニ人ノ居ヲ冬籠
ト作タリ妙言

○大...

○人ノ往來ヲ見ルカタ涼ノヨ
ウナリ風流ニシタリトウカ仲ノ
丁ノヨウナリ

○十月晦日ノアカツキノ句ナリ
江戸橋ヲ下邨ノ橋ニシタリ
貞ミセノ句是ヨリ外一句モ有
マレ

○年あけハ乃の女ハ白川
乃ミ川ハハもむさく若子
ルムこの水

○火桶ニハ繪ナト画モノ水
ヲ波ニカケテ波ヲカハマトナリ
汲ト桶トカケ合

氣よもやうてはさく冬終

きき各二十三日よ

おぼろはちの袖と
納豆汁

霜月朔日の例と
字眼

諸人や嵐芝居と冬籠

好軒の市店

人を見ん冬のもしお深

顔させや咲いさむ下邨の
橋

節叟老文七十の歌

白河の波を叫を相火桶

幡別らち波子一宿のす

〇廬生ナリ目覺テミレハマタ粟
 フカレキレトイ、シコトナリ六十
 モ五十モ同シ大ヨウニ句ハスルナリ
 一睡ノ中ニ飯カ焦テ白フナリ六
 十年ノ榮花ニ朝霜ノイタクフ
 ル音ナリ

きのあそふ十年の榮花を
 非階のまじりてけりを取
 けりしに我をまじりて
 ぬりけりしはまじりて
 粟飯の焦て白ふやあそふの
 法雲寺光僧春をまじりて

〇源氏故ニ季吟ノ家モエタル
 ハ夷構モセントシ
 〇是ハ庵ナトノヨウナリ獨居ノ
 氣色寂シ
 〇十月頃ノ枯ニ成タル菊ノ
 根ヲ掘レケレキ螻ノ手ニ白
 カノコリシトナリ
 〇紙子ノ火打ナリ火打ハ切
 ヲ少レツ、アツメルモノナリ
 〇木賊ハ節カ有ルモノナリ是ヲ
 夜ニ遣タルナリ半白ノ髪モ一
 節有故カレタルナリ
 〇蛇ノ貝ニテハ炭ヲコソ計ニ酒
 ヲ吞コトシ

源氏もや季吟の家夷構
 けりしはち獨居に在る
 螻のまじりて白ふやあそふの
 於人乃為の切て火打ふ
 髪の新木賊のひやお枯
 落のまじり其根をまじりて
 蛇のまじりて貝を吞み

○去年ノロヒキマテハ見ヘシ
カ今年ハ盛物モ茶ノ會席
ノヨウニレテ居ラルトナリ

○海アラヒムフリ落ルノカ海
ノサカ立テ雲ニモ、クセリ

○新古今
○山ノ
○海ノ

○本賊川その系山のなる
より、このれち、秋の
此月

○山犬ヲ馬カヨク知ルモノニ霜
夜ノ旅行ノ躰
鷺ニ簑モアリ

○杖本集
ハあか言
カニ穴一言カケテア十寒シ
ト置タリ

都きと名付

宗賣ハ茶

柯求老人の向茶人

山茶也や

海ノ

みりれて本城

山行

山犬をつら

みりれて

寒戸画瀆

何か

七五の解虫

○婚禮ノ賀ノ句ノヨウナリ
鴛鴦ノチキリナト、モ云ナリ

一 蘆ノトナルヘシ

○青砥左衛門モ鎌倉ノ老
中ナリ
公事サハクヲ政事ト懸合
タリ

○世俗板倉殿ノ冷火燧ト云

氷も雪もさらけと鴛鴦の中

住者

鶯のさえずりより流すやうの

雨防のちかぢかぢか

り行ふよ一生非あり

ささやく板敷のや

火燧も青砥の掃と拾り

○諷忠度ト書レタリ共有雜
談集ニ香シ

○諸候方ノ金ヲカリニ町人ヲ
ヨヒレナリサレハコソ汝トスヘ
タ

片手打扇の火燧を

幸のものか

忠度と所よりぬ火燧か

名もこのうらみ

これ手扇

衆よりふ鏡の娘の

三年成乾の圃

燧のや汝をよめる金の

○熊野ナリ二人共ニ生國ナリ
 今殘テ居ル大松ハ昔ノ二人
 カ軒ノ門テコソアラント云フ
 ○朧ノ清水ハ小原ノ行道ノ
 邊炭ハ小原ヨリ出
 ○煙ニヲトロキ狙ノサケフナリ
 山中ヨク叶フ
 ○炭俵ニシタル其木ノ葉カア
 ルナリ茶ノ枝炭ノ心モアリ是
 フ木ノ葉ト遣イタリ

炭竈ニ句
 炭ヤキノ指ソウ人金ノ
 炭ノ匂ヤ鈴木亀井ノ朝
 炭ノ如ク也朧ノ法ヲ鼻
 炭竈ヤ煙ヲぬけを猿ノ声
 可眼ノす眼も其木葉ナリ
 炭ノ火ノも葉ナリ

○白氏文集

地火ノや子や人を董以
 炭屑ノいやうは木ナレ
 ともあかノ一車とあ炭
 寒蠅炉をめくる
 指サれてある人ノ火の
 口切や指ノひひ子
 糸薙葡萄
 梅津某秋田一袋カ多カ
 粕壺の宿まで送付テ

○賀ノ句ナルヘシ

○並ヒレ花ナリ

○白入又集

こつよ春産あまつし

東居安慰 網代

屋了花子の梅を枝さぬや

山中高岩 不解 存せり

衿巻の松よりしほ三粒

並蔵のひびきの滝や寒作り

十石の雪おつてこれとあはさ

冬川や筏のすゝ州の系

○橋臺ノヨウナルモノヲ鑑ト言フ

○網代ノ小屋ト言ヘキヲ夜ト遣イシ所面白シ

閑倚橋

うひひ氷や鑑をふる橋柱

澁幅や氷の中よみさうり松

軽一ツ河 乃乃お乃きお

莫凍や簀子の竹乃くす狐

弟友

内蔵の古酒をぬる女

市隅の侘人

○世の中ハとてもかたても
るぬ一宮もま末屋もそ
てきれハ

○揚屋一夜具ヲ持運フ邪
ナニナリ

○源氏明石ノ巻

○蘇臺ハロウナハチ

宮堂をほしてあけもた
先を賣

揚屋のかきまきまの

鴨の毛をとりまて

鴨の毛や、雀の食乃乃

心もや、雀の食乃乃

浦邊は、石と大沖

細代を、とてらん

屋の七巻

○思ひの妹よりりハ冬
夜の川を氣さす千さ
あり

後成

○鷹渡ルハ秋ナリ

妹の川を氣さす千さあり

薩埵山にて

汐波の猪首も波のこめい

舟一上鷹つゝぬり船

京たつゝ人子業内にて

○伊勢物語ノ画

○平家物語横笛夫池(横笛身ヲ捨シユ一鴛ヲ見テ思ヒステ、モ昔ヲ思ヒ出ストナリ)

忍何... 池乃... 三月六日 人丸溝月次子 沖の帆も十... 夜の荒波よ... 空念仏橋... 湯...

○幻住菴ニテ句ニ一足の左杯... 翁トモアリ

酒飯の飲酒... 去来家... 千... 九... 南都... 寒... ひ... お...

○我々も心をけしむの深り
くまらつた事と
しつ

いれとをう縁結きて里中
夜神樂や鼻息白き面の内
雪買ふ雪を沽もぬ
清水流りて
むりいれ雪の舞臺の日は
知恩院町小宿とて
初雪おちくくくくく
大津まつり

○三體詩 吳天雪

雪の日は船政よの朝の色
ひくくくの名よて
馬くくく食まじか 雪の名
寒山のさへ
あゝ恩ふ門の雪はくを念が
西運寺興行
伏見
初雪お人もあつた伏見舟
初雪をわすれぬ

○三歸傳 吳天電

ちの雪や赤る見しもの
ほつちや雀の扶おの小土
門とて宮をたて
るよ家らひしそとやけき
む矮屋のたて
宮錢のふち世をよひゆき
官城御普清成終一
て諸家や慶美ぬきけるは

○鳥渡ノ留守ヲ訪ヒし時ナリ
清少納言ノ古事

○雪山ノ薪サカト云フ女ノアタ
名

陪臣ハ朱買臣ニ申さる袖
芭蕉ノ庭をとりて
衰老ハ麓もあけハ菴の雪
門の雪を掃けりやとふまわり
山居の偈を
雪をぬて猿り茶を煮たり
かもしよ一むれとまみり
秋かやうの山を雪の黒木か

○三十二相ノ内チ、シ髪ヲホツ
エカヨウ

○大掌會ノ服ナリ麻ニテ作リ
カタニ赤キニツノ緒アリ艸花
ヲスルモノナリ小鳥モアリ千ヲ
ナリ山監ニテ摺ナリ

○如意嶽ナリ

○月夜ノ句ナリ松ノ風ノ音妙

○皮カウマ馬カウヤト職人晝
歌合ニアル無味ノ句竹田甚口
ノ内ヨク歌ナラハ上品ナリ

○陸奥のあまのこゝろの黒塚小
鬼のついでとわのハヤシ下の
貫之ノ妹共ノ黒塚ニ籠リ居
時言遣ケリ

○閨ノ雪見ルト云フニカリ客
アレライハ我ヲ客僧ノヨウニセ
ラルトナリ

○あまのこゝろの隣のあり
きれなかのこゝろのそとに花
はりの色

○茶茶茶やあまのこゝろの知

ちりきりうごかざる女のあ

い名あやとけいさめり

雪解吟

雪ふもつちやう、ひやう、す

ほそ衣

寒望王叡山 四条道ヨリノ
ソミレ姿ナリ

雪宮也、十の字格の山の子

戸障子乃のり、おきくねの声

かか、や竹田へ帰るゆきの音

遊女土佐をむく、こゝろ

うとくぬて

黒塚の客あし、らひぬ関の

人霍装ヲ著テ

立徘徊

はつちきぬ、あまのこゝろの誰

うてり嵐

宗因

○木の葉ちりゝるよしの袖の色残るゝも

○イ千里マキスル鴨ナリ五徳ナリ

○牧ノ内ヨリユラレテ初雪ニモコマラス無事ナマツトナリ

内ニハハ土ノ品ナリ

めつしい物うほまの垣ぬ

鴨川の鴨を鉄輪よきえんか

或は方より雪見えむく

させぬふる上冷

初雪ふれぬえんれて雪

御城

楠の洞壺四間より一間とや

万客の唇をうらむせ

えつ雪如湯の所の大洞壺

三廻り扱手ノ方ナリ

もすきく川と云わたり

半衿の例崎も何如雪の松

人もまぬお乃独酌

初雪や十歳る此酒のえん

軍兵を圍炭てあつや雪

松の雪若ふつゝのけり

○渡リハ下タリト云ホトノ事

○我子ナリ

○軍師ノ兵ヲ待躰ヨキ句ニ

○一本ノ松ニテウコカヨ宗因ヲモトメスヨキ句ニ

○ヨクモ 敵覽ノ人ニナリテ御前
ヲ通ルトシ

○犬ヲ拂フ袖ノ雪ヲモシロシ
佐野渡一カヨウ

○捨テ外ミヲアルク共雪ノ宿
ヲハワスルノナトシ

切題十九
前もふ雪の白

敵覽の人ななりつげの

おまの盆もさあふあふ

出口平してたの

きぬは犬も拂袖の雪

十角ノ世ノ頂
行歌ナリ流
さあふあふ山あふ

おまの盆もさあふあふ

おまの盆もさあふあふ
坂カハシ

○夕昏ノ句行カフモ風流見
ユルナリ

○年中ノ苦吟ナリ

○伊勢物語の伴
すまろのうの山
いもも人よあまの
○長途狂倡ノ吟ト伊達衣
ニアリ

市中軍

初雪や門子橋の夕方

不分當春作病夫

酒をへと病を悟は

極月十日西の坂

いそしや

新堀まで合

○指日抄ノ御モアリ

料實

本をちる宿ハヤシクも
あきししれするとも
をの夜も

○人ニマリクテ又マ今年モ
サムレロニ寐ルトナリマツクナ
リシモ人ニマリレユヘナリ

○源氏栞の巻

今ハ〜〜宿ハね〜〜も
れきつる栞の〜〜も
我〜〜も〜〜も

繡衣や灯きて壁の影

解と底や宿ハ〜〜も

や〜〜れ〜〜もや狭き道の〜〜

書物此上ナリを何〜〜寸の巻柱

座右銘

行違や壁ヲ恥ス覚書

乳母めえ字眼もあ美女

御前の中あ殿あ〜〜〜

の〜〜物の中あ眠あ沈あ〜〜

年忘あ利伯倫あ〜〜〜

桶町ヨリ出シ年ナリ
震威流あ火あ志あつあ〜〜

妹ありあるあやあ薑あ〜〜けてあ繡あのあ番

○此句ヲ我坐右ノ銘ニレテヒ
ト、セヲ埒モナリ過レテ壁ニ恥
タルナリ

○我蓑ヲ作レ句ナリ

○殿スミテヨムナリ

○文選ニ酒徳賦アリ

○手ノハレカミレカ開ケテナリ朝
ノケレキ火馬場ノ姿ナリ

○發行人若大くして居る煤
いれとおのり書こそ座つ
るるれ

○小原ノ男ハ惣髪ナリ
禁裡ノ百姓ナリ俗行幸ニ牛
ヲ出し舎人スト云フ晋子時代
行幸ナキヲ有ルヨウニ作タリ

○此位ノ外坐守ハ後ニテ

煤掃てぬお女房の

京子老をむらや

おつこの御も同子あり

行幸の牛はひかりまのなる

狐鬼五つの子を産る莊子籠

ふやーふえはておやふけ

いん子をいひこ

○義經記臘月ナリ

○いせもの語
あふらうはあぢもめて
そそはつるれい人の老と
あふもれ

年をとる鬼ふ夜焚ぬ

すけつひ増と侘て世松尾

童ふい志ころ路巾也煤

志信り芳野仕也やあばつひ

有のき新の悟氣も改き

閑窓よ羽帚をのり

煤このまつれを人の陳徳

○陳皮ノツモルヨウニ人モ老行
トナリ
○閑窓ノ羽箒をめぐり
此句ノ前書ナルヘシ

○割裾類家ヲ云ト言 少シ
ツマヒラカナラス

下野

珠明云フ

○揚屋ヨリ女郎屋へ遣ルヲ
サレ紙ト言フムカシ手形ナリ

○ワキ言葉
小傾城共ニナラレテ候
晋ハウラヲ作リタリ
○丈夫 光俊
山崎のまのすくもこのま
にうくもあつとあは心
りり

鼻を掃孔雀の玉如煤
御煤翁ハ竹取

紀國屋文左衛門事
千山宅より忘ふ

別すもやハシ女沖樂男

揚屋子醉房トテ

戀の手差紙巻をいづり

海の市をれをいづり

小傾城行てなるん

山陵のき分とははす

女子の疱瘡

家よりきんじん

餅の粉や必雪うつみ

行あるまの油

○京都ニテ乞食餅ノ札ヲ門
ノニ張ルナリ乞食ヲ弱法師ト
作タルナリ

○隱逸傳
千觀相弱刺史敏貞子也
淀ノ渡口ニ出テ為馬夫惠行
人千手觀音ニ父母祈ル仍
テ名テ呼フ

○大津ノ驛ニ昔馬借ノ名テ
千觀ト言シアリマタ千手觀
音トハカケ合テ馬モセワレトス
ルナリ

○孫康カ雪車胤カ螢

○螢雪ヲアツメテ學シ古事
ニツレリヤウニテカリレ史記モ師
走ニ金ヲトラルカ螢ナリト作
タルナリ題雪窓ト置タリ

○あ代乃メをいけりし

樂性

市隅

弱法師系門ゆきせ餅の札

焙餅屋の夕日きつけし

糸と松ある市の夕阿

自悔 三十

ふもりのいさむるし

大津驛

千觀のりよせハヤのる

雪窓

損料の史記を研芝の螢の

年の瀬やひしめのむねの
物思

行年や緒評定おほ

八ノナリ 腹音の...
まにまに...
...
...
...

ハナリ

音...
...
...

...
...
...

...

千鶴...
...

大津...
...

